

六ノ一二一 笠置寺貞慶願文（十三重塔造立供養）

出典 讚仏乗抄（東大寺藏）

活字本讚仏乗抄（校刊美術資料寺院篇、中央公論社に所収）や鎌倉遺文第二卷一〇
一二号もあるが、不正確な箇所が多く、東大寺所蔵の原典によった。

解説 建久九年十一月に完成した十三重塔の内部の様子を記し、この十三重塔が般若報恩

塔と称される由縁を記す。

この願文には貞慶の神祇信仰への思いが記されている。

原文

笠置寺

奉造立木瓦葺十三重塔一基

奉図母屋柱大迦葉須菩提舍利弗目犍連阿難陀羅睺羅等

羅漢像合六躰

奉図扉後左右障子等靈鷲山清涼山釈迦超劫等図六幀

土等像合八躰

奉図扉後左右障子等靈鷲山清涼山釈迦超劫等図六幀

奉図上層四天王像各十二躰

奉造立皆金色一尺六寸釈迦如来像一躰

奉図鏡面文殊師利菩薩像一躰

奉造立綵色一擲手半四天王像各一躰

奉摺写唐本大般若經一部六百卷

奉納仏舍利三粒弥勒菩薩像一千躰

奉摺写妙法蓮華經一部八卷無量義觀普賢等經各一卷

奉書写大乘本生心地觀經一部八卷宝篋印陀羅尼

以前塔婆尊經甄録如此伏惟我大日本国者天祖降跡人主布

政以来至德安道王化久ク伝東作西蜚民業永ク繼風化則從上而 注一・「要」か

行フ下ニヤトシテ莫不戴上ノ徳産業ハ亦経テ古而及今々トシテ莫不受古ノ功ヲ是以八

十余葉之君臣皆垂遺美於歴代之月六十余洲之人禽互結芳

縁於月郷之風加之磯城金刺之宮釈教伝通之後推古之御宇ニハ 注一・右に「同」

上宮王撰テ政焉始テ教諸悪莫作之道天地之明時ニハ大織冠執テ権矣

永開難思解脱之門自而以降継躰守文之主皆守リ付屬於如来

之金言佐功立命之臣多專護持於像末之遺教善男善女於法
有功之者多則多矣不足籌量矧復道照道慈之傳弘法傳教之

匠トモカ髮珠募テ直忘身命於兩朝之俗甘露嗜ム味貽利益於千代之塵

至于如彼行基菩薩之導ク九洲覺母新ニ示シ応化身鑿眞和尚之伝テ

五篇ヲ天子忝ク承ルカ戒定ヲ者蠻夷猶恭フ其跡ヲ荆染セシ悉受其賜凡厥八

宗末学伝灯写瓶弘濟ニ三道ニ仏智難測者也ニ仏子受生於神国解注一・右に「三」注二・右に「之」

形於積門一期之間含恩含儀二諦之徳不可不報千界ニ投トモ宝難

以テ報一分之恩憶劫割トモ身難以謝一日之功若發菩提心者亦動

他人ヲ令ム発名注一眞実ニ能ク報四恩嗚呼自未発一念之大心豈能勸他注一・右に「之」

人ヲ令メンヤ注一発未知二親ニ之近コト慈況及群生哉報謝之道何足思□□□□

□□□□□況誓度娑婆宝海大臣殊悲濁世大士之弘誓尚思自界

因縁下凡之初心宜先一国之分齊爰尋吾朝之濫觴者皆為天

照大神之開闢思一代之撰化者莫不釈迦大師之出世不如行

二聖之方便以酬一国之恩徳是以塔婆注一ハ是世尊之墳墓也般若注一・右に「義」

是神道之上味也慕恩飭徳莫大於此矣仍卜此地之風□□□□

立十三重之支提訪異域之煙波早ク写六百軸注一○之華文我所憑之注一・右に「帙」

尊像舍利以安置其内我所勸之善友知識以助成此功或人ハ加

淨財ヲ於礎石也不異蘓峨公之初注一□注一シ注一ニ注一焉或人瑩ク黄金於表柱也相チウニ

同シ上宮之自チリバメ鏤注一矣一階ツカサトル掌注一土木之家々各成ス願主之思莊嚴交

衆宝之人々互契来世之縁莫大之構不図而終□□爾時擺テ巖

洞兮屈龍象跪テ石壇兮捧香華音楽一両曲僅驚天仙之聽見聞

千万人互ニ拭歎喜之涙三輪洗磨寒谷之水雖冷一縁結露故園

之菊猶芳シ昔玄奘三藏之建立靈塔也深ク報ス國家之聖恩注一今瘞瘁注一・右に「垂」

沙門之造高頭也泣酬本朝之広徳高祖之志ニ仏子蓋傲号之

般若報恩塔ト蓋欲令後昆知我心而已然則日本一国之間天地

開闢以來不扞人倫鬼神不漏山禽水獸受生注一此土之者宿身ヲ当注一・右に「族」

国之類令其未注一発起者悉發菩提心令其不定聚ノ類ヲ速住正定聚注一・右に「趣」

一人若發心セハ彼人亦勸化展多重周遍セム一国ニ但或自注一近注一ギ三乘之

行位或已ニ生十方之仏土於若又和光同塵權化大聖注一以此之人注一・右に「如」

仰為導師各垂加被冥助此事縱逢千仏之出世常啓此願縱送

三祇之長劫ヲ不忘今ノ誓自此漸及微塵之刹土依其注一遂得普賢之注一・右に「滿」

願海衆要雖区一門可足抑我心已異人亦衆望何同此願注一々注一々注一ハ以注一・右に「思」

此一門之廻向遂ニ円満彼衆人之所求願令彼衆人之所求還撰
受此一門之廻向現当互為善知識自他同証大菩提 敬白

建久九年十一月七日

読み下し文

内容は難しいが敢えて読み下しを試みた。一例として参考にして欲しい。

笠置寺

木瓦葺(注一)十二重塔一基を造立し奉る

母屋の柱に大迦葉・須菩提・舍利弗・目犍連・阿難陀・羅睺羅等の羅漢像合せて六躰を
図き奉る。

扉の面に梵王・帝釈・日天・月天・難頭龍王・沙迦羅龍王・金剛力士等の像合わせて八躰
を図き奉る。

扉後の左右の障子等に靈鷲山・清涼山・釈迦超劫等の図六幀を図き奉る。

上層には四天王の像各十二躰を図き奉る。

皆金色なる一尺六寸の釈迦如来の像一躰を造立し奉る。

鏡面に文殊師利菩薩の像一躰を図き奉る。綵色一搦手半の四天王の像各一躰を造立し奉る。

唐本大般若經一部六百卷を摺写し奉る。

仏舍利三粒、弥勒菩薩の像一千躰を納め奉る。

妙法蓮華經一部八卷、無量義・觀普賢等、經各一卷を摺写し奉る。

大乘本生心地觀經一部八卷、宝篋印陀羅尼を書写し奉る。

前以て、塔婆尊經に甄録(明細に記録すること)すること此の如し。

伏して惟うに、我が大日本国は天祖の降跡にして、人主(君主、きみ)布政以来、至徳
(この上ない徳)の要道(大切な教え)王化(君主の政治が行き渡ること)を久しく伝へ、東作西
蟄(耕作と養蚕)の民業永く継ぐ。風化(人を教え導き、善に感化させること)は則ち上に従いて
下に行い、々(下)として上の徳を戴かざること莫く、産業(なりわい)も亦古を経て今に
及び、々(今)として古の功を受けざる莫し。是れ以って八十余葉の君臣、皆遺美(前人の
残した美しいもの)を歴代の月に垂し、六十余州の人禽、互いに芳縁を同郷の風に結ぶ。

之に加へ、磯城金刺宮(欽明天皇の皇居。桜井市にあり)に釈教伝通の後、推古の御宇に上
宮王(聖德太子)政を撰りて、始めて諸悪莫作(諸悪をしてはいけないということ)の道を教え、
天地(智?)の明時(太平の世)には、大織冠(中臣鎌足)権を執りて永く難思(仏の教え教え
を贊嘆する語)解脱の門を開く。爾より以降、継躰守文(先祖の遺業を継承して武力によらないで
国を治めること)の主は皆、如来に付属(師が弟子に法の奥義を伝授し、それを後世に伝えるよう託
すること。ここでは依存すること)せる金言(不滅の法語)を守り、佐功立命の臣は多くは、像

めて□しに異ならず。或は人黄金を表柱に鑿くや上宮の自ら鏤しに相い同じなり。一つの階、土木を掌るの家々、各願主の思いを成し、莊嚴、衆宝（もろもろの価値あるもの）を交える人々、互いに来世の縁を契りて莫大の構へ図らずして終わる。

□□この時、巖洞（岩の洞穴）を擺きて龍象（高僧）を屈め、石壇に跪きて香華を捧ぐ。音楽一両曲、僅かに天仙の聴を驚かし、見聞する千万人、互いに歓喜の涙を拭い、三輪（世界を支えている三つの輪）を洗磨（あらいみがく）す。寒谷の水冷たしと雖も、一縁に結露し故園（ふるさと）の菊は猶芳し。

昔玄奘三蔵の靈塔を建立するや深く国家の聖恩に報ず。今亜痒沙門（貞慶）の高頭（十三重塔のこと）を造るや泣きて本朝の広徳に酬ゆ。高祖の志、仏子蓋し倣いて、之を号して般若報恩塔とす。蓋し後毘（子孫）をして我が志を知らしめんと欲するのみ。然れば則ち、日本一国の間、天地開闢以来、人倫鬼神を扱はず、山禽水獸（族？）も漏らさず、生を此の土に受ける者、身を当国に宿すの類、其れ未だ發起せざる者をして悉く菩提心を発せしめ、其の不定聚の類をして、速やかに正定聚（迷いのない境地に入ること）に住せしめん。一人若し発心せば、彼の人亦勸化（教え、導くこと）し、展転（人から人へ伝えること）多重（いくつも重ねること）し、一國に周遍（天下にゆきわたる事）せん。但し或いは自ら三乗の行位に近づき、或いは已に十方の仏土に生れ、若くは又和光同塵（仏が衆生を救うため仮の姿を俗世に現す事）に於いて大聖に権化す。此の人を以て仰ぎて導師と為し、各加被（加護）を垂れ、此の事を冥助す。縦へ千仏の出世に逢うとも常に此の願を啓し（申し上げる）、縦へ三祇（三阿僧祇劫、即ち無限に近い長い時間）の長劫（極めて長い時間）を送るとも今の誓いを忘れず。此れより漸く微塵（小さい塵）の刹土（国土）に及び、其れにより遂に普賢の願海（菩薩の深く広い誓願を大会にたとえる）を得ん。衆の要（誓うこと）、区（別々）と雖も、一門（悟りに至る道）足るべし。

抑も我が心、已に人と異なる。亦衆望何んぞ此の願に同じならんや。々（願は）くは、此の一門の廻向を以て、遂に彼の衆人の求むる所を円満（願いが満たされること）にされんことを。願わくは彼の衆人の求むる所をして、還りて此の一門の廻向を撰受し、現当（この世とあの世）互いに善知識と為し、自他同じく大菩提を証（悟る）せしめんことを。

敬白

建久九年十一月七日

（注一）木瓦、即ち木で本瓦葺きを模して葺くこと。平安時代以降は多く用いられたらしい。中尊寺金色堂は現存最古の木瓦葺きである。「コガワラ」ともいう。